

いわゆる結婚適齢期の20代～30代の4割近くが「恋人が欲しいですか」という問いに「いいえ」と答え、その主な理由として、「仕事や勉強、趣味に力をいれたい」に加え、約5割の人が「恋愛に興味がない」を挙げている。その社会的背景は何だろうか。

第一に、価値観の多様化があると考えられる。以前なら、男女は結婚し、子どもを育て、家族に見守られながら老後を過ごすことが当然と考えられていた。そういう時代には、仕事や趣味と恋愛は別だった。よき仕事人であり、よき家庭人だった。しかし、自分の生き方は自分で決める自己決定権の意識が広まり、女性の社会進出が進み中で、趣味や仕事を生きがいとして生きる人が増えてきた。彼らは、恋愛は仕事や趣味と同列である考え、恋愛をとるより仕事や趣味に情熱や時間をかけたいと思っているのだろう。

第二に、恋愛の先にある結婚や育児に対するマイナスのイメージの広がりだ。子どもを出産し22歳まで育てるための養育費は平均1600万円かかるという調査結果がある。また、賃金労働者の4割が収入が安定していない非正規労働者だと言われる。このような状況で、若者が、恋愛し結婚し子育てをすることに期待を持っていないのは無理もないのではないだろうか。

日本は少子高齢化と人口減少が進行している。地方では過疎化が深刻化し、生活を営むための社会基盤が失われつつある「限界集落」が点在している状況だ。このような流れに歯止めをかけるためにも、結婚や子育てを支援する大胆な施策を実行に移すべきだ。